



Title	<翻訳>フェルディナン・ブリュノ : フォノグラフと「方言」 (パトワ)
Author(s)	Cordereix, Pascal; 鈴木, 聖子
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 235-256
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔翻訳〕 フェルディナン・ブリュノ
 ——フォノグラフと「方言」^{パトワ}

Ferdinand Brunot, le phonographe et les « patois »

Ferdinand Brunot, the phonograph and the “patois”

パスカル・コルドレクス
 鈴木 聖子 訳

要旨：

When Ferdinand Brunot created the « Archives de la parole » at the University of Paris-La Sorbonne, he set up the first institutional collection of sound recordings in France. The phonographic collection of French dialects was at the centre of the « Archives de la parole » system. The innovative element was to achieve a phonographic, linguistic atlas of these dialects and patois « in the field », in systematizing the use of the phonograph instead of the written transcription. Yet the project was not free from ambiguities and contradictions. The innovative or even visionary use of the phonograph was actually instrumentalized by an archaistic view of dialects and of those who spoke to them. They were thought as the persistent and fossilized mark of a bygone past, rich of lessons for the history of the ... French language.

We will take as a case study the phonographic mission in the Ardennes between June and July 1912. The 166 sounds recordings this mission left illustrate this paradox.

キーワード：蓄音機、録音採集、音声アーカイヴ

フェルディナン・ブリュノ Ferdinand Brunot によって 1911 年にソルボンヌ大学に創設された音声アーカイヴ les Archives de la parole は、フランス初の公的機関における録音コレクションである。発話された言葉の様々な表現を録音し、保存し、研究することに捧げられたこのアーカイヴは、フェルディナン・ブリュノが推し進めた政治闘争の一環を成すものであった。文法学者、フランス語の歴史言語学者、そして熱烈な共和主義者^{レピュブリカン}であったブリュ

ノは、事実、フランス語の教育と用法に関して近代化の立場を表明したことによって、保守派の人々から憎悪に満ちた怨嗟の声を浴びることになるのである。

音声アーカイヴ

音声アーカイヴの構想の中心には、フランスの「方言」^{パトワ}¹⁾の録音採集があった。革新的であったのは、文字による音韻転写の代わりにフォノグラフの使用を体系化することによって、方言や地域語のフォノグラフ言語地図を「現地で」作成しようと企てたことである。しかしながらこの事業は、曖昧さと矛盾に満ちていた。なぜなら、革新的でしかも先見的なフォノグラフの使用が、ここでは方言とその話者たちに懐古主義的な視線を向ける手助けをしたからである。方言とその話者たちは、遠い昔の過去から存続して凝固した遺物であるかのようにみなされながらも、言語の歴史に、つまりはフランス語の歴史に、豊かな知見をもたらすと認識されたのであった。

このパラドックスを描くために、本論が事例研究として取り上げるのは、フェルディナン・ブリュノと彼の元教え子であるシャルル・ブリュノー Charles Bruneau が、1912年6月から7月にかけてアルデンヌ地方で実施した録音調査である。実際のところ、この調査が残した166点の録音資料は、フェルディナン・ブリュノの仕事において、進歩と前時代的なものの表象が複雑かつ矛盾に満ちた拮抗関係にあったことを、明らかにしてくれるのである。

音声アーカイヴの認識論的基盤

1911年6月3日、フェルディナン・ブリュノは、実業家エミール・パテ Émile Pathé の協力を得て、ソルボンヌ大学に音声アーカイヴを設立した。このアーカイヴは、フランスで設立された最初の公的機関としての録音コレクションであり、パリ〔ソルボンヌ〕大学がいずれ設置しようと望んでいる音声学研究所の礎石となるものでもあった。

最初に生じる疑問は、言語学者というより文献学者——この微妙な違いは重要である——が、なぜ書かれた言葉ではなく発話された言葉についての研究に着目したのか、そしてその結果、なぜ調査と知識の媒体として録音に着目したのかということであろう。まさにこうした発話された言葉と録音との関連こそが、音声アーカイヴの基盤なのである。実際、この音声アーカイヴの起源には、文献学と実験音声学という、発話された言葉への関心を示した二つの学問の多大な影響があったが、当時このような関心は新しいものであった。

1) 「方言 patois」、「地方語 dialecte」、「地域語 parler」、「言語 langue」という用語の語彙的、意味論的な研究は、本論の限界を超える問題である。本論では「方言」という用語を、フェルディナン・ブリュノの体系的な用法に依拠して使用するが、彼が「方言」と「地方語」という概念との間に明確な線引きをしていたかという問題には立ち入る余地がない。

概観するならば、19世紀末フランスの文献学は、発話された言葉と書かれた言葉の間に、前提として二項対立を設定していた。発話された言葉は、言語の「自然な」進化を反映するものとされた。それに対して書かれた言葉はといえば、洗練や逸脱が働くことで、とにかく信用に足らぬものとされた。このようなことで、こうした観点から方言学が発展し、学校教育、社会規範、〔地理的な階級的な〕交渉などの影響を被った言語とは対照的な、「純粋な言語現象」としての方言や地方語への関心がみられるようになることが説明できる。

これと並行して、19世紀の物理学と音響学の発展により、もはや〔書かれた〕記号を用いる音声学ではない、音・発声を用いる音声学が誕生した。この音声学は、ジャン＝ピエール・ルスロ神父 l'abbé Pierre-Jean Rousselot の表現を借りるならば、「死せる文献ではなく、生きて話す人間」²⁾ という考え方に基づいている。もとよりルスロは、このようなアプローチにおいて最も傑出した例であり、調査、測定、理論構築の手段として録音用シリンダーや人工口蓋などの器具を体系的に使用したことで、実験音声学の父とみなされている。方言学の分野では、ルスロは初めて「現地」へ録音機器を携えて行った人物であった。彼はその調査を主題とした博士論文『セルフアン村（シャラント県）の一家族の方言に見られる言語の音声変化』によって、1892年にソルボンヌ大学から博士号を授与された。これを境に、ルスロはフェルディナン・ブリュノに確たる影響を及ぼし、1911年、ブリュノはルスロに音声アーカイヴの館長就任を打診したほどであった。ただしこの計画は、政治的な理由(1905年の政教分離を思い起こされたい)から実現しなかったのであるが。

したがって、19世紀末には、発話された言葉はアカデミズムの場によって正当化（これは制度化を意味するのではない）が果たされていたのである。フェルディナン・ブリュノは、音声アーカイヴによって、この論理を最後まで推し進めることになる。フランス語の真の特質は発話された言葉に備わっており、書かれた言葉はこの発話された言葉を常に歪曲するものであるから、発話された言葉を忠実に写し取ることができる何か物質的なもの、媒体を選ぶ必要がある。それゆえ、こうした見地からすれば、フォノグラフは、人間が話した言葉を最も即座に最も「忠実に」再現するものとして必要欠くべからざるものであった。

以上が音声アーカイヴの創設の基本前提である。これらのことをフェルディナン・ブリュノがたどった道筋と音声アーカイヴ創設の文脈とに結び付けていかねばなるまい。

創設者：フェルディナン・ブリュノ

フェルディナン・ブリュノは、1860年にヴォージュ県のサン・ディエに生まれた。1879年、エミール・デュルケーム Emile Durkheim と同期に高等師範学校に入学。在学中、ブリュノ

2) Abbé ROUSSELOT, [ca] 1923, p. 6.

はなかでも 19 世紀末フランスの文献学の重鎮ガストン・パリス Gaston Paris のセミナーに参加している。1882 年、文法の上級教員資格試験アグレガシオンに首席で合格。1883 年から 1891 年まで、リヨン大学で准教授として、中世文献の古文書学者であるレオン・クレダ Léon Clédat と共に仕事をする。後にブリュノは、クレダが提示したいくつかの主題のうち、例えば方言の研究や綴り字改革の必要性といったものに再び取り組むことになる。1891 年、文学の博士号を取得。その同年、ソルボンヌ大学に「文法・文献学講義」〔の准教授のポスト〕が彼のために創設される。1900 年、やはりソルボンヌ大学において、これも彼のために創設された「フランス語史」の講座の正教授のポストに就任し、そこで 1934 年まで教鞭を取ることになる。

この講座の名称はまさに、フェルディナン・ブリュノの代表的かつ記念碑的な大著『フランス語の歴史 その起源から現在まで』を思い起こさせる。ブリュノは存命中に、その著作を 10 巻 18 冊本として出版し、それは計 1 万ページ以上にのぼるものであった。これは、現在もフランス国立科学研究センター CNRS のジェラルール・アントワヌ Gérald Antoine の監修のもと、刊行が継続されている〔現時点の最終巻は、ベルナル・セルキリーニ Bernard Cerquiglini & ジェラルール・アントワヌ共同監修『フランス語の歴史 1945-2000』(CNRS、2000 年)〕。

文法学者としてのブリュノの仕事は、1922 年刊行の『思想と言語』が挙げられよう。教育者としての活動は、次の二つの著作に結実している。一つは、1905 年から 1908 年にかけて出版された『フランス語教授法』で、これは〔ラテン語をモデルとせずフランス語を用いた〕直接法でのフランス語の習得を目指したものである。もう一つは、やはりそれと同じ趣旨で 1909 年に出版された、小学校の授業のための『フランス語教育法』である。

ブリュノの政治的な社会参加アンガジュマンに関していえば、彼は熱烈な共和主義者で、啓蒙思想の継承者で、当初からのドレフュス派であり、これらのことは音声アーカイヴ設立の文脈を明確にしてくれるだろう。こうした極めて政治的でイデオロギー的な文脈は、これまでおそらく十分に論じられてこなかったのである。

対立の文脈

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのフランスでは、大規模な教育改革が、構造と内容ともに徹底的に行なわれた。この教育の近代化について、本論では次の 3 つの局面を取り上げる。すなわち、教育・研究におけるフランス語のラテン語からの自立、綴り方改革の試み、直接法のような革新的な教授法の導入である。

ここで重要なのは、音声アーカイヴの創設を、この改革運動の流れの中に置いて眺めることであろう。そうすることで、音声アーカイヴがこの近代化を推し進めたいという願望を根

底に持っていたことがはっきりとし、またそれを通して、音声アーカイヴが改革運動によって生じたイデオロギ的・政治的な闘争の道具であった様子も見えてくるのである。実際のところ、これらの改革の試み——それなりの成果を上げていた——に、保守派陣営はみな衝撃を受けていた。そして彼らは直ちに、大学教授たち、特にソルボンヌ大学の教授たちを、教育を「ドイツ化」し、フランス文化を売り渡したかどで非難した。論争は、〔国粋主義的政治団体の〕アクション・フランセーズの介入によって、国家主義、反共和主義、ユダヤ排斥の毒がその内に充満していった。こうしたことが口開けとなって、1910年から1911年には、この論争は現在の私たちが「フランス語の危機」と呼びならわしているものに到達する。いくつかの同盟が結成された。保守側には「ラテン語友の会」、次いで「フランス文化同盟」が現れた。これらの同盟に対抗して、フェルディナン・ブリュノは1911年7月、「フランス語と現代文化の友の会」を設立した。ここで、彼が1911年6月、つまりその1ヶ月前に、音声アーカイヴを創設したことを思い起こしておこう。7月18日、『フィガロ』誌が「フランスの伝統の不倶戴天の敵、ブリュノ氏」という見出しを掲げると、ブリュノがそれに反撃して、象徴派詩人ジャン・ロワイエール Jean Royère の『隊列』誌に「ラテン語病」と題する記事を掲載するといった具合であった。

これ以上、文脈の説明に立ち入ることは差し控えるが、フェルディナン・ブリュノが音声アーカイヴを創設した志向性を理解するためには、こうした文脈が不可欠であることは明らかであろう。

音声アーカイヴの構成

フェルディナン・ブリュノが創設を目指した音声アーカイヴには、一つのモデルがあった。それは、1899年にジグムント・エクスナー Sigmund Exner がウィーン科学アカデミー内に創設した、ウィーン・フォノグラム・アーカイヴ Vienna Phonogrammarchiv である。フェルディナン・ブリュノが分類法の枠組みを設定するにあたって、このフォノグラム・アーカイヴに影響を受けたのは確実である。音声アーカイヴの録音資料は、以下のように5つのセクションに分けられ、各セクションがアルファベットの一文字で表示された。

– セクション I は俳優 *Interprète* のセクションである。このセクションは、〔朗読などの〕言い回しの録音、フランス語の正しい発音の録音に当てられている。この規範的な側面は、音声アーカイヴについての今日の私たちの認識においてはその重要さが過小評価されているが、当時の言語学の文脈においては要となるものであった。ここには例えば、1911年に〔コメディ・フランセーズの女優の〕セシル・ソレル *Cécile Sorel* が朗読した〔モリエールの〕『人間嫌い』からの抜粋などが収蔵されている。

– セクション O は、教授や弁護士などの「演説者 *Orateurs*」の録音に当てられている。概

観すると、このセクションは現在の私たちがこの時代の「有名人の声」と呼んでいる録音に対応する。例えば、エミール・デュルケームの声や、またギョーム・アポリネール Guillaume Apollinaire、モーリス・バレス Maurice Barrès、さらにはドレフュス大尉 commandant Dreyfus の声を聴くことができる。もっとも、このセクションの方法論的限界の一つは、これらの「有名人の声」が、実際には書かれた作品や演説を朗読したり、詩を朗誦したりしていることである。ここではのめかされている口頭性は、書かれたテキストを介しての口頭性なのである。

- セクション L は言語 Langue のセクションである。このセクションは、外国語の録音と、フォノグラフの使用によって発展した言語習得法の開発に当てられている。思い起こしておきたいのは、音声アーカイヴ創設のかなり以前、フェルディナン・ブリュノが〔政府公認のフランス文化・フランス語の普及団体である〕アリアンス・フランセーズの言語研究所の発展に大きな役割を果たしていることである。

- セクション M [疾病 maladie] は、発話と聴取についての病理学を扱っている。

- 最後に、セクション D [地方語 dialecte] は、世界中の地方語の録音、特にフランスの地方語の録音に当てられており、なかでもフランスの方言と地方語のフォノグラフ言語地図を編纂するプロジェクトがここに含まれているのである。

フォノグラフ言語地図プロジェクト

音声アーカイヴのこの言語地図プロジェクトという構成要素に着目する理由は、基本的に二つある。まず、このフォノグラフの言語地図のプロジェクトが、音声アーカイヴから音声博物館 Musée de la parole へ、そして国立フォノテック Phonothèque nationale へと至る 1970 年代末までの全歴史を通して見られることにある。換言すれば、このプロジェクトは、現在のフランス国立図書館の視聴覚部〔現・音・ビデオ・マルチメディア部〕の前身である、公的機関としての録音アーカイヴの全歴史に渡って見られるということである。ただし筆者には、このプロジェクトのモデルが歴代の解釈の仕方によってどのように反復されそしてまた中断されたのか、その点を検証する必要があると思われる。次に、言語地図プロジェクトの公式化についての問いが、フランスでは、この公式化を生じさせた文脈と密接に関わっていること、そして言語を国家の表象として政治的言説に組み込んでいく方法と切り離さないことにある。

こうしたことは、フェルディナン・ブリュノのプロジェクトにはっきりと現れている。

このフォノグラフ言語地図という概念は、ジュール・ジリエロン Jules Gilliéron とエドモン・エドモン Edmond Edmont による『フランス言語地図 Atlas linguistique de la France』を明らかに参照している。『フランス言語地図』は、ジリエロンが構想し、エドモンが 1897

年から1901年にかけて現地調査を実施して、1902年から1910年にかけて出版された。これはフランス初の方言学の言語地図であり、フランスの言語地理学の起源となるものである。1897年から1901年まで、エドモンはガロ・ロマンス語地域の639の地方を訪れ、そこでその都度、ジリエロンが作成した質問票に答えてくれる情報提供者を探した。調査が終了すると、ジリエロンは質問票の各項〔にある標準フランス語の語彙〕に対応する〔地方語の語彙の分布〕地図を作成した。項ごとに一枚の地図になっており、地図にはその項がタイトルとして付けられた。

フェルディナン・ブリュノは、明らかに何度かこの地図をモデルとして参照しているが、フォノグラフを使用してそれを上回る仕事をしたいと意欲を燃やした。そして彼は「フランス地方語調査プロジェクト」を起草したのである。12年間で2,500の村を訪れ、1つの村につき平均10枚程度のレコードを録音することで、「調査」の終了時には合計15,000枚のレコードが完成する見込みであった。実際には、この当初の計画と比較して、実現した数字はかなり控え目なものとなる。1912年と1913年に、フェルディナン・ブリュノはフォノグラフによる3つの調査を率いた。1つ目は1912年6月から7月にかけてフランス領とベルギー領にまたがるアルデンヌ地方、2つ目は1913年6月のペリー地方、3つ目は1913年8月のリムージャン地方である。音声アーカイヴが実施したのは、結局この3つの録音採集の現地調査のみであった。

アルデンヌ地方での調査

現地調査

アルデンヌ地方の調査は、こうした仮定段階にあるフォノグラフ言語地図の第一歩であった。

アルデンヌ地方が最初の調査地に選ばれたのは、フェルディナン・ブリュノ自身の言葉にしたがえば、「準備の整った」地域で仕事をしたいという、彼の希望によるところが基本的に大きかった。しかも、彼の元教え子の一人であるシャルル・ブリュノーが、アルデンヌ地方の地域語に関する博士論文『アルデンヌ方言の音声研究』で博士号を取得したところだった。したがって、フェルディナン・ブリュノの「手中に」、彼の専門ではない方言学を専門とする研究者と、すでに慣れ親しんだ土地があったというわけである。師から連絡を受けたシャルル・ブリュノーは、フォノグラフを用いるこの現地調査の基本理念に熱烈に同意して、次のような返信を書き送っている。「厳密に正確な記録、絶対的な科学的価値のある記録を用いることを選んで、それを確立することによってアルデンヌ方言に関する私の研究を完璧

なものにできるのは「…」、望んでもないことです」³⁾。

調査日程が問題含みであった。二人とも7月から9月にかけての時期しか都合がつかず、最終的に7月の決行の予定となった。調査は1912年6月24日から7月22日まで行なわれることになったが、この期間は干し草作りの「忙しい」季節にあたるため、あまり好都合ではないことが予想された。しかしシャルル・ブリュノーは次のように明言している。「農民たちの予定についてあらかじめ何かを想定するのは難しいでしょう。この時期は天気が良ければ干し草の取り込みに出かけます。いずれにせよ、半日あたり2.50フランの謝礼は十分に魅力的ですから、被験者を見つけるのに事欠かないでしょう」⁴⁾。

調査地のルートを組んだのはシャルル・ブリュノーである。それは次の2つの条件をもとに構想された。

- 「一つは、）博士論文研究の準備中に訪れた93村で培った現地調査の経験、ならびにエドモンとジリエロンの『言語地図』から得た知識である。
- もう一つは、経済的な理由による制約である。実際のところ、この調査はフランスにおける最初の現地調査⁵⁾のなかにあつて、初めて移動手段として自動車を使用したものであった。

理想的な車を見つけるのは難を極めた。最終的に、1912年6月18日、アルダ自動車会社がフェルディナン・ブリュノーに、「シャロン社の30馬力の賃貸のリムジンを3～4週間、1,200～1,500kmの行程で」⁶⁾貸してくれることになった。フェルディナン・ブリュノー自身の言葉によれば、これは「3人の成人男性と同時に、およそ容積1立方メートル、重さ500キロのかさばる荷物を運ぶことができる自動車」⁷⁾であった。これらの荷物の中には、パテが提供した録音用の機材が当然含まれていた。パテは今回は、——そしてこれは録音史における重大な一コマであるが——、これまで使用していたシリンダー式〔蝸管式〕ではなく、円盤式のレコードに直接録音できる機材をこの現地調査に装備していた。

3) シャルル・ブリュノーからフェルディナン・ブリュノー宛の1912年6月9日付の手紙、BnF, Archives du département de l'Audiovisuel, cote DAV。

4) シャルル・ブリュノーからフェルディナン・ブリュノー宛の手紙、日付なし（1912年6月頃）、BnF, Arch. du dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3。

5) この調査以前には、とくに1905年から1910年の間に実施された、フランソワ・ヴァレ François Vallée によるブルターニュ地方の調査とシリンダーの録音資料がある。

6) アルダ自動車会社からフェルディナン・ブリュノー宛の1912年6月18日付の手紙、BnF, Arch. du dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3。

7) フェルディナン・ブリュノー、1913年1月16日にソルボンヌ大学で行なわれた講演の彼自身による手書き原稿、BnF, Arch. du dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 4。



アルデンヌ地方のフォノグラフ調査、1912年：調査のために借りた車中のシャルル・ブリュノー〔左〕とフェルディナン・ブリュノ〔右〕〔プリント、フランス国立図書館視聴覚部アーカイヴ所蔵〕
 « Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France »



アルデンヌ地方のフォノグラフ調査、1912年：録音現場。左から右へ：シャルル・ブリュノー、フェルディナン・ブリュノ、ブリュノ夫人〔プリント、フランス国立図書館視聴覚部アーカイヴ所蔵〕
 « Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France »

1912年4月から6月の間に、シャルル・ブリュノーは上記の言語学的かつ経済的な制約を熟考した上で、いくつかのルート案を作ってフェルディナン・ブリュノの手に委ねた。最終的に「探検」ルートとして選択されたのは、メジエールの北東から東へかけて半径約100kmの地域で、フランス領とベルギー領のアルデンヌ地方を包含するものであった。シャルル・ブリュノーが博士論文で扱った93村のうち、ベルギー領内の15村、フランス領内の20村、計35村を、エドモンの『言語地図』に倣って1日平均2～3村のペースで訪問することになった。1912年3月18日、シャルル・ブリュノーはフェルディナン・ブリュノに次のように予告している。「迅速に進めるのは難しいでしょう。まず初めに私の被験者を探し出すべきです。ただし、被験者が森にいたり、洗濯をしていたりしたら、何もできません。時間や場所の条件について、前日に現地でも話し合っておく必要があります。というのは、朝の8時に村に到着したら、みんな出かけてしまっているからです」⁸⁾。さらに同じ手紙の先のところで次のように続ける。「エドモンも指摘していますが、ここに深刻な問題があるのです。1日に2つか3つの村を回ることができるかもしれませんが、平均してそのように早く進めることはできないでしょう」⁹⁾。

また、二人の研究者の往復書簡の中には、とりわけこの「被験者」についての描写を通して、前時代的なものというステレオタイプに当てはめた、地元住民のある種の表象が構築されているのが見て取れる。例えばブリュノは、録音現場について詳しく述べながら、「ある

8) シャルル・ブリュノーからフェルディナン・ブリュノ宛の1912年3月18日付の手紙、BnF, Arch. dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3.

9) *Ibid.*

女性は〔フォノグラフの〕箱に向かって目を凝らし、まるでそれを“妖術”かなにかのように、“悪をもたらす”かもしれない何かがある中にあるのではないかと探っていた¹⁰⁾と思い出している。さらにまた、「セヴィニー・ラ・フォレにて10時から12時まで実施された、ポーラン・ルバ Paulin Lebas との実験」についての記述では、「被験者は素晴らしかった。土着的であり、教養があった¹¹⁾と振り返っている。この「実験」はフェルディナン・ブリュノに極めて強い印象を残したようで、1913年1月16日に行なわれた講演でも再びこれに触れている。「村には、理解しようと望み、耳を傾けることのできる人々が、ソルボンヌ大学と全く同様にいます。セヴィニー・ラ・フォレのポーラン・ルバは、本当の農夫です。我々が到着したとき、彼は草地にまったくの裸足で立っていて、本当の草を刈っていました。それからしばらくして、録音機の前に座ると、彼は熱意をもって学ぼうとする、どんな調査にも協力できる学生になっていました……」¹²⁾。ポーラン・ルバは「土着的」であり「本当の農民」であるにもかかわらず、それでもなお「どんな調査にも協力できる」だけに、いっそう「素晴らしかった」というわけである。換言すれば、ポーラン・ルバはフェルディナン・ブリュノが出会った村の人々に対して抱いていた前時代的なものや古風さという偏見を無効にしただけに、いっそう「素晴らしかった」のである。

さらに、アルデンヌ地方がすでにシャルル・ブリュノーの訪問を受けていた土地であったこと、そして、今回の現地調査が初等教育の視学官の公的な後押しを受けたものであることを思い起こしておく必要がある。初等教育の視学官は、中等教育区の視学官の要請を受けて、アルデンヌ地方の全小学校教員に宛て、ブリュノ氏に協力するように求めて、次のような文書を送っている。「聞き取り調査をすべき被験者を氏に紹介し、その実験に必要なであれば学校の一室を使用できるように提供するなど、可能な限りの協力をして下さい¹³⁾。ベルギー領では、1912年6月21日付で、ベルギー当局に、特に教師たちに宛てて、パリ大学評議会議長から同様の書簡が送られている¹⁴⁾。同様に、6月22日、リエージュ・ワロン文学協会は、「市長殿・主任司祭殿・〔小学校〕教諭殿」に宛てて書簡を送り、「シャルル・ブリュノー教授が指揮する文献学調査に十分なご配慮を頂けるよう」依頼している¹⁵⁾。二人はマスコミの

10) フェルディナン・ブリュノ、1913年1月16日の講演の手書き原稿、前掲。“妖術 Diablerie”と“悪をもたらす *rechignar*”は、いずれも引用した原文の表現。

11) フェルディナン・ブリュノ『旅行用手帳』、手書きの日記帳、manuscrit, BnF, Arch. dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3。

12) フェルディナン・ブリュノ、1913年1月16日の講演の手書き原稿、前掲。ポーラン・ルバの録音については、以下に所蔵されている：cotes AP 166, 167 et 639, BnF, dpt. de l'Audiovisuel。

13) アルデンヌ県の小学校教員たちに宛てられた初等視学官局の文書、ジャン・オスト Jean Haust, 1912, 64頁からの引用。

14) ルイ・リヤール「副大学区長、パリ大学評議会議長」の1912年6月21日付手紙、BnF, Arch. du dpt. de l'Audiovisuel, DAV 3。

15) リエージュ・ワロン文学協会のジャン・オストから、「市長殿・主任司祭殿・〔小学校〕教諭殿」に

存在も忘れなかった。シャルル・ブリュノーは1912年6月18日、次のように記している。『『ブチ・アルデネ』誌を介して人々に働きかけられます […]。私たちの意図がいかに純粋なものであるかということ、つまりこの調査が雨もアフト熱〔口蹄疫〕ももたらすものではないことを、そこで理解してもらえましょう […]。こうして世論は私たちを迎え入れてくれるでしょう』¹⁶⁾。

「世論」という言葉がここでどのような意味で用いられているのかは明らかだが、二人はこのような「世論」を持つ人々のうちから「被験者」、つまり証言者を選ぶ必要があった。したがって、録音するモノローグやディスカッションの主題は予め決まっており、それ以外のものは排除された。要するに、すべては二人が「被験者」に対して抱いていた文学的な表象、つまり、素朴で、閉鎖的で、前時代的な、といった表象に合致している必要があった。フェルディナン・ブリュノの言葉を引用しよう。「ブリコ氏は、我々が望んでいることを非常によく理解していたので、近代的な農法について話すのを自ら止めた。というのは、近代的な農法においては機械や化学肥料が必然的に大きな役割を果たしており、彼の日常言語にフランス語由来の学術用語を混ぜることになるので、それが地方色を台無しにしてしまうからである」¹⁷⁾。このような証言者の素早い反応も極めて興味深く、ここで指摘しておくに値する。アドルフ・ブリコ Adolphe Bricaud は、自分に何が期待されているかを完全に理解しており、その期待に応じて、フェルディナン・ブリュノのために素朴で「古風な」農民を「演じる」ことまでしているのである。

逆説的にも、シャルル・ブリュノーは、〔近代の〕録音機器と、こうした過去に結びつけられた「被験者」への軽蔑的な表象との間の弁証法から、フォノグラフを使用した現地調査の特徴を浮かび上がらせていく。シャルル・ブリュノーはフェルディナン・ブリュノとの1912年4月から6月にかけての往復書簡の中で、実際のところ、それまで用いていたモデル、すなわちエドモンとジリエロンの質問票に疑問を呈している。例えば1912年6月9日付の手紙で彼は次のように述べている。「私はまた、この質問票では好ましくない結果が待ちうけているように思えて心配です。『地図』〔エドモンとジリエロンの『地図』のことを指す〕の質問票では、全くうまくいかないことがあったのです。質問票は極めて単純なものなのですが […]。これから私は、以前お送りしたのとは異なる新しいタイプのものを準備しようと考えています」¹⁸⁾。

宛てた1912年6月22日付の手紙、BnF, Archives du dpt. de l'Audiovisuel, DAV 3。

16) シャルル・ブリュノーからフェルディナン・ブリュノ宛の1912年6月18日付の手紙、BnF, Arch. du dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3。

17) フェルディナン・ブリュノ、1913年1月16日の講演の手書き原稿、前掲。アドルフ・ブリコの録音は以下に所蔵：cotes AP 146, 147, 154, 155, 217 et 218, BnF, dpt de l'Audiovisuel。

18) シャルル・ブリュノーからフェルディナン・ブリュノ宛の1912年6月9日付の手紙、BnF, Arch.

実際には、この質問票というアイデア、つまり〔方言の〕語彙や表現を〔標準フランス語に〕翻訳するための質問票というアイデアは、完全に放棄されることになる。シャルル・ブリュノーが『アルデンヌ歴史評論』誌で述べたように、「私たちは被験者に語りたいことを語りたように語らせた」¹⁹⁾のである。

もっとも、先に引用したフェルディナン・ブリュノーの言説を思い起こすと、証言者側に語りたように語る自由があったかどうかは疑問が残る。それは留保するとしても、フォノグラフの使用は、辞書学的な調査そのものを変化させたのである。シャルル・ブリュノーは、やはり『アルデンヌ歴史評論』で、それを次のように追認している。「異なる方言の間で同じことを意味する表現を比較できるという利点は失われた」²⁰⁾。調査目的のこうした変化について、シャルル・ブリュノーはすでに3月18日から証言者の選択に疑問を呈しながら、やはり質問票の件で解決の糸口も見えず矛盾をはらんだまま、次のように表明していた。「もはや重要なのは、厳格なまでに純粋な語彙と語形とか、出来る限り古風な性質をもつ語彙と語形とかを総体的に得ることではなく、地方アクセントを得ることです。このようなことから、よく考えた末、私はこれまでの被験者の大部分を放棄することになりました。今までは教養のある被験者を選び、極めて未開の状態にある老女を採用していたのです。彼女たちからはあまり複雑な文章は引き出せないでしょう […]。比較的若くて少し教育を受けた人でも、村に生まれ、村から出ていないのであれば、被験者として申し分ないでしょう。多くの若者たち、さらに子供たちも起用してよいのではないかと考えています」²¹⁾。

したがって調査の目的は、ここではもはや厳密な歴史や比較ではない。各地方の郷土色を価値づけして再構築することが目指されているのである。再びシャルル・ブリュノーの『アルデンヌ歴史評論』の論考から引用しよう。「私たちのレコード盤は、それぞれが人生の断面のようなものである」、そしてその少し先で、「ゆえに私たちのレコードの総体は、単に地方語の語彙や語形を収集したものではなく、アルデンヌ地方の人々の仕事・習慣・風習・歌・独自の言語によってアルデンヌの人々の生活の集大成のようなものを作り上げているのである」²²⁾。

こうして最終的に、この方言学の調査は当初の目的とはまったく異なるものに行き着いたのであった。もしくは、より正確に言えば、この調査はフォノグラフを使用することで、例えば、口頭伝承を録音という手法によって採集する事業の始まりといったような、もっと別

du dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3.

19) Ch. BRUNEAU, 1912, p. 265.

20) *Ibid.*

21) シャルル・ブリュノーからフェルディナン・ブリュノー宛の1912年3月18日付の手紙、BnF, Arch. du dpt. de l'Audiovisuel, cote DAV 3.

22) Ch. BRUNEAU, 1912, *op. cit.*, pp. 265-267.

の何かに行き着いたかもしれなかった。しかし、そうはならなかったのは、まず、そのような考察のための概念的なツールがまだ準備されていなかったからであり、そして、当時の方言学の調査には文献学的・歴史学的な制約が大きく働きすぎていて、調査の目的自体を超えるような概念化ができなかったからである。

この点で調査結果を処理した仕方には非常に興味深いところがある。アルデンヌ地方での現地調査から、フェルディナン・ブリュノとシャルル・ブリュノーは166点の録音資料を携えて帰還した。その一式には、ウィーン・フォノグラム・アーカイヴに倣って目録が作成され、地理的な場所、証言者の略歴、それから証言者の発話の音声転写が記された。質問票の使用をやはり中止していたにもかかわらず、関心が払われているのは相変わらず何が言われたかという語彙と地理についてであり、その発話がどのような条件の元で行なわれたのか、その言説がどのような文脈で構成されたのかではないのである。

文献学とフォノグラフ：擬古主義と近代性の間

この現地調査の経緯と目的を検討すると、フォノグラフという調査機器が有する近代性と、この機器を使用することの根幹にある観念の「懐古主義」とでもいったものとの間に、明らかな拮抗があることが見えてくる。

この拮抗を理解するために、フェルディナン・ブリュノにおける言語の表象について改めて観察する必要がある。熱心な共和主義者であった彼は、先述の著作『フランス語の歴史』の第九巻²³⁾で、フランス革命期に行なわれた研究、特にグレゴワール師 l'abbé Grégoire の研究、なかでも1794年のグレゴワールの著作『方言を撲滅し、フランス語の使用を広く普及させる必要と手段についての報告』²⁴⁾に精力を傾けており、その方法のうちに彼の言語表象の一例を見て取ることができる。ブリュノにとって、「言語は国民精神が産出したものであるが、その見返りに言語は国民精神をその自由と力において涵養してくれるものである」²⁵⁾。

グレゴワールとブリュノの繋がりには、いくつかのレベルにおいて観察することができる。ブリュノはグレゴワールに深く畏敬の念を抱いており、1931年に「グレゴワール師友の会」を設立し、その議長を務めている。思想面では、グレゴワールに倣い、革命国家とフランス語の間に、次のような正当性の弁証法を打ち立てている。「一つの国家はただ一つの言語しか有してはならないという教義を、現代における福音の本質的な教義の一つとして保持する

23) F. BRUNOT, 1937.

24) Michel de CERTEAU [et al.], 1975 を参照。300頁から317頁に、グレゴワール師の『報告』がすべて翻刻されている。

25) F. BRUNOT, 1937, *op. cit.*, p. 148.

べきである」²⁶⁾。同様に、「この巨大な闘争〔革命〕において、ほとんどあらゆるところでフランス語が〔…〕その一翼を担ったことはまったく疑いが無い」²⁷⁾とも述べる。ブリュノはその理由として、〔革命家の〕バレールの言葉を引用する。「自由な人民の言語は一つでなければならない、すべての人にとって同じでなければならない、〔…〕民主主義において、市民が国語を知らず、権力を統制できない状態のままにしておくことは、祖国への裏切りである、〔…〕フランス語は〔…〕、すべてのフランス人の言語にならないといけない」²⁸⁾。

フェルディナン・ブリュノとグレゴワール師のイデオロギー的な親近性については、ジャン＝クロード・シュヴァリエ Jean-Claude Chevalier がブリュノの『フランス語の歴史』を分析した論考で、以下のように強調している。「方言が存続していることは啓蒙思想の普及に反し、国語の理想に反し、地方の合併にさえも反している。なぜなら方言は途方もない断片化の中で分裂しているからである。しかしブリュノがとった戦略は革命家たちの戦略よりもはるかに柔軟なものであった〔…〕。彼は学校教育による自然な習得を信頼し、年月と良識に任せたのである」²⁹⁾。ここでブリュノは、民主主義と進歩という革命の理想を再度強調しているわけである。こうした理想をもつ「啓蒙思想」の概念は「科学」の概念に取って代わられたものの、しかしその理想を実現するための必要条件は、相も変わらず国語としてのフランス語であり、フランス語をあらゆる階層の人々に普及させることであり、すべての人々がフランス語を習得することなのであった。

これと同時に、ブリュノがここで表明しているような言語の「断片化」の同義としての方言という解釈は、ガストン・パリヌやポール・メイユール Paul Meyer といった19世紀末パリのロマンス語学者や方言学者たちの立場と極めて近いものである。彼らは方言を範例的な〔フランス語の〕語彙リストに分散させることで、方言を一つの言語として捉える可能性を徹底的に破壊したのである。

このような考え方に立って、フェルディナン・ブリュノの1911年の『音声アーカイヴ創設趣旨演説』と、そのなかでも方言を録音する計画について語っている以下の個所を読み直す必要がある。「最も緊急な課題の一つは、失われつつあるものへ向かうことであるように思われる。我々の周囲ではすっかり、偉大な老人たちが瀕死の状態にある。つまり我々の方言のことである。新しい交流手段によって何百倍にも膨れ上がった、学校、新聞、商業関係の影響のもとで、村々は古くから続く地域語を一つまた一つと捨て去ろうとしている。数年後にはその地域語も変形するか廃れてしまうだろう。フランス語は兄弟たち〔である諸方言〕

26) *Ibid.*, pp. 9–10.

27) *Ibid.*, p. 22.

28) *Ibid.*, p. 181.

29) J.-Cl. CHEVALIER, 1992, p. 456.

に対して長子相続権を有する者ではないが、北フランスのすべてと南フランスの一部を自分のものにするだろう […]。厳選された農民が数分間の言葉を吹き込んだシリンドラーは、これまで等閑視されてきた方言を忘却と消滅から救うだろう」³⁰⁾。

しかし、フランスの大学という文脈では、方言は僅かとはいえ受け入れられていたにしても、それは一方では、「地域語」としてというよりも「文学」としてであった。もう一方では、ブリュノの先の『演説』によく反映されているように、「記念物」あるいは歴史的発展の証言者、つまりフランス語の歴史的発展³¹⁾の証言者としてであった。このような面においてブリュノは、ガストン・パリスマイエル・ブレアル Michel Bréal の大学での土着言語研究に見られる、明らかに古典語研究をモデルとした文献学の制約を直接に継承する者である。ガブリエル・ベルグニウ Gabriel Bergounioux は、1888年に〔フランス南部の都市〕アレスで行われたパリの有名な演説を引用しつつ、次のように表現している。「方言への愛は、^{ネクロフィリア}屍体愛好となる。ガストン・パリスマイエルは […]『フランスの地域語』を収集しようと呼びかけるが、それは『植物標本』に貼り付けるためだけなのである」³²⁾。

こうした観点から見れば、フォノグラフの使用にもかかわらず、方言の採集においてフェルディナン・ブリュノが仕事の前提としているのは、彼に先行する人々が前提としたものとはほとんど変わらないのである。以上のことから、先に述べた拮抗とは、19世紀末のフランスの文献学という概念的な枠組みと、フォノグラフという物質的な機器との間に起因する^{アンチノミニ}二律背反であるように思われる。この概念的な枠組みは、フランス第三共和政の初期のイデオロギ的・科学的文脈によって規定されたものであるが、その誕生時の文脈に固定されたまま、封じ込められているように見受けられる。これとは対照的に、フォノグラフは、この20世紀初頭、技術的に開発されたばかりの黎明期にあり、録音技術で世界を描いたり人が言葉を語ったりする可能性をもって登場したところであった。要するに、一方には、文献学の体系がそれを生み出した社会的・政治的文脈から切り離しがたく存在しており、それはソシュール革命³³⁾と第一次世界大戦による断絶という二重の打撃のもとで、多かれ少なかれ減退していく。そして他方には、これらと同時期に登場した、現実世界を切り取る機械であるフォノグラフ〔=録音機〕とフォノグラム〔=録音盤〕があり、まさしく未使用の原

30) F. BRUNOT, 1911, p. 13.

31) 参考までに、ジリエロンは1888年に「古代フランス語の地方語の変化」の研究の枠組みで講義を行なった。

32) 以下を参照のこと：G. PARIS, 1888, pp. 1-19, G. BERGOUNIOUX, 1992-2, pp. 122-123.

33) フェルディナン・ド・ソシュールによる連続三回の講義は、1907年から1911年にかけてジュネーヴ大学で行われた。これらはソシュールの死後、『一般言語学講義』というタイトルで、二人の弟子であるシャルル・バイイ Charles Bally とアルベール・セシユエ Albert Sechehaye によって1916年に刊行された。

盤³⁴⁾として、あらゆる投資と受容に開かれて準備が整っていた。

この最初の対立から第二の対立が生じていく。すなわち、フェルディナン・ブリュノが知の拠り所としている文献学は、方言を「死につつある偉大な老人」とみなしていた³⁵⁾。それはガストン・パリスとその「植物標本」の文献学でもあった。つまりフェルディナン・ブリュノは、方言や地方語の実際の死あるいはほぼ「約束された」死を前提とする表象体系に組み込まれており、それで方言や地方語を過去や前時代的なものに完全に帰属させて封印したのであった。まさにこの考え方の中に、彼は音声アーカイヴを立ち上げたわけである。ところがフェルディナン・ブリュノは、自説を補強するために、進歩と近代性の名のもと、近代の利器であるフォノグラフに頼っていく。ゆえに彼のパラドックスは、この機械が聞かせてくれる地域語や方言に見出すことができる。それらの地域語や方言は、確かに消滅の危機に脅かされてはいるが、しかしとても活発で、今も活気あふれる文化の担い手であり、前時代的ななどということは決してなく、「他者」のものということなのである。

フェルディナン・ブリュノは、彼の言説の前提となるものと、この前提を無効にする現実との間に生じたアポリアに解決の糸口を見いだすことができず、話者である「農民」を文学的・民話的に表象し、その中に自らの調査を閉じ込めてしまった。こうした表象は、1913年のベリー地方での現地調査では、まさに文学として姿を現すことになる。ブリュノはそこで方言学の調査をする代わりに、ジョルジュ・サンド Georges Sand の架空の世界を音で真に再現しようと没頭し、サンドの養育者の娘にあたる人物で、調査時には74歳であったルイズ・ブリオール Louise Briaud にインタビューまで行なうのである³⁶⁾。

結局のところ、フォノグラフがここで私たちに聞かせてくれるのは、話者の言葉であるということでは確かであるのだが、しかしまた、そして何よりもまず、それはフェルディナン・ブリュノをこの調査へと駆り立てた、進歩（国語、科学、フォノグラフ）と前時代的なもの（「方言」と地方語）の表象体系なのである。

本論を締めくくるにあたって、逆説的な方法であるかもしれないが、フェルディナン・ブリュノのフォノグラフを使用した現地調査の先駆的な側面について指摘しておくべきであろう。

実際のところ、フランス内でフォノグラフを用いた公的な現地調査が改めて行われるのは、それから26年後のことである。その一つは、1939年に実施されるロジェ・デヴィニユ Roger Dévigne と国立フォノテック Phonothèque nationale によるニース内陸部での現地調

34) 字義どおりにも、比喩的にも。

35) 上記文中『音声アーカイヴ創設趣旨演説』を参照のこと。

36) ルイズ・ブリオールの録音は以下に所蔵：cote AP 516, BnF, dpt. de l'Audiovisuel.

査で、もう一つは、同年の国立民俗芸術伝統博物館によるバス＝ブルターニュ地方〔ブルターニュ半島西部でブルトン語が伝統的に話される地域〕での現地調査である³⁷⁾。さらに強調しておくべきは、これらの二つのケースがいずれも「音楽的フォークロア」を収集するための現地調査であるということである。

言語学の調査に関して言えば、フォノグラフを用いた現地調査の実践が本格的に定着するのは、それから40年後、1950年代になってからのことである。それはアンドレ・マルティネ André Martinet³⁸⁾の先駆的な仕事のあとを受けて徐々に定着していき、地域別言語地図を実現するプログラムとして実施されることになる。このような観点から眺めるならば、音声アーカイブとフェルディナン・ブリュノの仕事がこの分野においていかに革新的なものであったかが、よりよく理解できるだろう。

参考文献〔一次資料の当時のウェブサイト一覧はリンク切れのため省略〕

Annales de l'Université de Paris, 1938, mars-avril. (Nécrologie de F. Brunot)

BALIBAR, Renée, LAPORTE, D., 1974, *Le français national : politique et pratique de la langue nationale sous la Révolution française*, Paris, Hachette.

BERGOUNIOUX, Gabriel,

- 1984, « La science du langage en France de 1870 à 1885 : du marché civil au marché étatique », *Langue française*, septembre, 63, pp. 7-41.

- 1992, « Les enquêtes de terrain en France », *Langue française*, février, 93, pp. 3-22.

- 1992, « Linguistique et variation : repères historiques », *Langages*, décembre, 108, pp. 114-125.

- 1994, *Recueil de travaux sur l'histoire sociale de la linguistique en France de 1815 à 1914*, Thèse, Paris 7

BOMPAIRE-EVESQUE, Claire-Françoise, 1988, *Un débat sur l'université au temps de la troisième République : la lutte contre la nouvelle Sorbonne*, Paris, Aux amateurs de livres.

BOURDIEU, Pierre, 1995, *Ce que parler veut dire : l'économie des échanges linguistiques*, Paris, Fayard. (1ère éd. 1982)

BOUVIER, Jean-Claude, 1982-1983, « Les atlas linguistiques et ethnographiques de la France », *Technologies, idéologies, pratiques*, 4-n° 1 à 4, pp. 227-242. (Numéro spécial : *L'ethnocartographie en Europe* : actes de la table ronde internationale organisée par le Centre d'ethnologie méditerranéenne, Aix-en-Provence, 25-27 novembre 1982).

37) アベ・ファルカン Abbé Falc'hun、クローディ・マルセル＝デュボワ Claudie Marcel-Dubois、ジャンヌ・オボワイエ Janine Auboyer によるもの。

38) André Martinet, 1945 を参照。

- BRANCA, Sonia, 1982, « Espace national et découpage dialectal : deux étapes de la construction de la dialectologie au XIXe siècle », *Trames* (Limoges).
- BREAL, Michel, 1891, « Le langage et les nationalités », *Revue des deux mondes*, XII-n° 1.
- BRUNEAU, Charles,
- 1912, « La conservation des patois ardennais », *Revue historique ardennaise*, T.XIX.
 - 1913, *Etude phonétique des patois d'Ardenne*, Paris, H. Champion, 1913
- BRUNOT, Ferdinand,
- 1911, « Discours d'inauguration des Archives de la parole, Université de Paris », *Inauguration des Archives de la parole : 3 juin 1911*, Paris, Impr. Albert Manier.
 - 1937, *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, Tome IX, « La Révolution et l'Empire », Paris, A. Colin.
- CARTON, Fernand, 1995, « La phonétique expérimentale, la phonologie, les archives sonores », ANTOINE, Gérard, MARTIN, Robert, dir., *Histoire de la langue française, 1914-1945*, Paris, CNRS, pp. 873-893.
- CERQUIGLINI, Bernard, 1989, *Eloge de la variante : histoire critique de la philologie*, Paris, Minuit.
- CERTEAU, Michel de, Julia, Dominique, Revel, Jacques, 1975, *Une politique de la langue. La Révolution française et les patois : l'enquête de Grégoire*, Paris, Gallimard.
- CHANET, Jean-François, 1996, *L'école républicaine et les petites patries*, Paris, Aubier.
- CHEVALIER, Jean-Claude,
- 1992, « L'Histoire de la langue française de Ferdinand Brunot », NORA, Pierre, dir., *Les lieux de mémoire*. Tome III, vol. 2, Paris, Gallimard, 1992, pp. 420-459.
 - 1994, « F. Brunot (1860-1937), la fabrication d'une mémoire de la langue », *Langages*, juin, 114, pp. 54-68.
- CHEYRONNAUD, Jacques, 1986, *Mémoires en recueils : jalons pour une histoire des collectes musicales en terrain français*, Montpellier, Office départemental d'action culturelle.
- CHOLEY, Claude, 1995, *Ferdinand Brunot, professeur, militant, maître à penser : un "mandarin" sous la IIIe République*, Thèse, Tours.
- CORDEREIX, Pascal, 1997, *Les fondements épistémologiques des Archives de la parole*. Mémoire de DEA, EHESS (Paris) sous la direction de Roger Chartier et Catherine Velay Vallantin.
- COSTE, Anne, 1996, *L'œuvre grammaticale de Ferdinand Brunot à travers les archives de l'Institut*, Thèse, Paris VII.
- FEBVRE, Lucien, 1928, « Le français sous la Révolution, d'après M.: Ferdinand Brunot », *Revue de synthèse historique*, 45, pp. 112-118.
- GALIMARD, Kalinka, 1992, « L'enquête, l'enquêteur, l'enquêté (le témoin) », *Langue française*, février, 93,

pp. 53-73.

GILLIÉRON, Jules, EDMONT, Edmond, 1902-1912, *Atlas linguistique de la France*, Paris, Champion, 37.

GRAMMONT, Maurice, 1912, « Inauguration des Archives de la parole », *Revue des langues romanes*, LV-5, pp. 116-118.

HAUST, Jean, 1912, « Le phonographe et les patois », *Bulletin du dictionnaire général de la langue wallonne*, n° 1-2, pp. 62-66.

HOBBSAWM, Eric, 1992, *Nations et nationalisme depuis 1780 : programme, mythe, réalité*, Paris, Gallimard. (Ed. originale anglaise 1990)

JAMIN, Jean, 1982, « Objets trouvés des paradis perdus : à propos de la Mission Dakar-Djibouti », HAINARD, Jacques, KAEHR, Roland, dir., *Collections passion*, Neuchâtel, Musée d'ethnographie.

MARTINET, André, 1945, *La prononciation du français contemporain : témoignages recueillis en 1941 dans un camp d'officiers prisonniers*, Paris, Droz.

NICOLET, Claude, 1995, *L'idée républicaine en France : 1789-1924 : essai d'histoire critique*, Paris, Gallimard. (1ère éd. 1982)

PARIS, Gaston, 1888, « Les parlers de France », *Bulletin de la Société des parlers de France*, I-1.

POP, Sever, [1950], *La dialectologie : aperçu historique et méthodes d'enquêtes linguistiques*. Première partie, Dialectologie romane, Louvain, chez l'auteur, Gembloux, J. Duculot

RENAN, Ernest, 1949, *Oeuvres complètes*. Ed. par H. Psichari, Paris, Calmann-Lévy.

ROSELLI, Mariangela, 1994, *La langue française entre Science et République, 1880-1950*, Thèse, Grenoble.

ROUSSELOT, Abbé Pierre-Jean, [ca] 1923, *La phonétique expérimentale : leçon d'ouverture du cours professé au Collège de France*, Paris, Boivin et Cie.

SIMONI-AUREMBOU, Marie-Rose,

- 1987, « Les entretiens enregistrés à caractère dialectologique et ethnotextuel », *Les nouvelles archives : formation et collecte : actes du XXVIIIe Congrès national des archivistes français*, Paris, Archives nationales.

- 1991, « Les atlas linguistiques : des *Linguarum totius orbis vocabularia comparativa* (1787) à *l'Atlas Linguarum Europae* (1983) », *Mémoires de la Société de linguistique de Paris*, nouvelle série, T. I.

VEKEN, Cyril, 1984, « Le phonogramme et le terrain : la mission Brunot-Bruneau dans les Ardennes en 1912 », *Recherches sur le français parlé*, 5, pp. 45-71.

VIGIER, Philippe, 1979, « Diffusion d'une langue nationale et résistance des patois en France au XIXe siècle », *Romantisme*, 25-26, pp. 191-208.

著者紹介

著者のパスカル・コルドレクス Pascal Cordereix (1957-) は、フランス国立図書館 BnF 音-ビデオ-マルチメディア部〔旧視聴覚部〕の元・上級司書監 conservateur général。ブザンソン大学で哲学を修めた後、社会科学高等研究院 (EHESS) の歴史学の博士課程で学ぶ (指導教官はロジェ・シャルチエ)。共著に、『フランスのシャンソン 100 年』(ガリマール、2004 年)、主要論文に、「パリ植民地博覧会における音声博物館の録音資料：学術とプロバガンダと商業のあいだで」(2006 年/邦訳、『阪大音楽学報』、2021 年、URL : <https://researchmap.jp/perca912/misc/35793338>)、「フランス国立図書館視聴覚部コレクションの保存計画」(2009 年)、「詩のマチネの記録：音声アーカイヴにおけるギョーム・アポリネール」(2017 年) 等がある。現在は博士論文として執筆していた 20 世紀初頭のフランスの録音アーカイヴの歴史について研究成果の一部を、2024 年の刊行に向けて準備中。

訳者あとがき

本稿は、パスカル・コルドレクス Pascal Cordereix 著 « Ferdinand Brunot, le phonographe et les « patois » » (*Le Monde alpin et rhodanien. Revue régionale d'ethnologie*, n° 1-3/2001, pp. 39-54) の全訳である。パリ・ソルボンヌ大学の文献学者フェルディナン・ブリュノが、フランスの初の公的機関としてのフォノグラム・アーカイヴである「音声アーカイヴ」を創設した経緯を、その政治的背景とアルデンス地方でのフォノグラフによる「方言」の現地調査を中心に、一次資料に基づいて初めて明らかにしたものである。フォノグラフという科学の利器が、文献学という書かれた言葉の科学の基盤をソシュールの「言語学革命」前夜に揺るがした経緯が興味深い。というのは、それと同様のことが、訳者の専門である音楽学にも同時期に起こっていたからである。ただし音楽学では、本論にも出たウィーンフォノグラム・アーカイヴの他、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学のベルリナー・フォノグラム・アーカイヴについては知られているもの (これら域独のアーカイヴはユネスコの「世界の記憶」に登録されている)、それらと並ぶ歴史をもつフランスのフォノグラム・アーカイヴについては等閑視されてきた。こうしたことがかつて訳者をフランス留学させた理由の一つであったが、フランスのフォノグラム・アーカイヴの歴史は自国でも十分に研究されておらず、そのなかで出会ったのが本論である。本論は、20 世紀初頭の言語学と音楽学という二つの学問領域で用いられ始めた黎明期のフォノグラフの、渾沌として未分化であるがゆえに可能性に満ちた姿を描いており、この魅力こそが文献学には門外漢の訳者が翻訳を試みた一つの理由である。フランス語原文はインターネット上でも読むことができるため (URL : https://www.persee.fr/doc/mar_0758-4431_2001_num_29_1_1729)、読者諸賢の忌憚のない御意見・御批判を待つ次第である。

翻訳にあたって不明な点は、著者のパスカル・コルドレクス氏に逐一問い合わせて回答を得ており、また氏の了解のもと、訳者による解説・補足は訳者注を用いる代わりに、出来る限り読みやすく端的な形で〔 〕内に入れて本文中に挿入した。煩雑な共同作業に最後までお付き合い頂いたコルドレクス

氏には、ここで改めて謝意を表したい。

本稿のタイトル訳について、解説しておくべき語彙が二つある。一つは、「フォノグラフ」である。これは、録音技術を発明した一人であるトーマス・エジソンが名づけた登録商標 phonograph (のフランス語表記 phonographe) をカタカナで表記したものである。このエジソンのフォノグラフはシリンダー式(円筒式)であるが、その数年後、エミール・ベルリナーが現在のレコードの原型となるディスク式(円盤式)を開発する。後者は、「グラモフォン gramophone」という登録商標である。「フォノグラフ」も「グラモフォン」も、日本語の辞書では同じく「蓄音機」と訳される。本稿において「フォノグラフ」という訳語を使用したのは、本論にはフランスのレコード会社のパテがアルデンヌでの現地調査を機にシリンダー式からディスク式へと移行した記念碑的な瞬間があり、そこでパテがディスク式になったにもかかわらず「フォノグラフ」という名称を継続して使用していたこと、そしてブリュノとブリュノーも「フォノグラフ」を使い続けていたことに鑑みて「フォノグラフ」を用いた。コルドレクス氏は本論執筆後、パテがアルデンヌの現地調査に提供したディスク式の録音機器について調査を進め、文中の写真に見られる二つの吹き込み口をもつ特殊な形の「ロネオフォン ronéophone」であったことを突き止めている(ロネオフォンについては、同著者に以下の共著論文がある: Pascal Cordereix, Luc Verrier, « Le ronéophone Pathé, au cœur de l'enquête des Ardennes », *Revue de la BNF*, 2017, 2 (n° 55), pp. 40-51. DOI : <https://doi.org/10.3917/rbnf.055.0040>)。

タイトルの訳語について、もう一つ述べておきたいのは、「パトワ patois」という用語に関してである。日本語の辞書では「方言」と訳されるこの語は、しかしフランス語で「方言」を指し示すもう一つの用語 dialecte と比較すると、「前時代的」という社会的な蔑視のニュアンスを含んでいる。したがって現在では patois ではなく、dialecte を使用することが推奨される。しかし、patois 概念の変遷を追っている佐野直子の研究によれば、19世紀から20世紀にかけての patois と dialecte の概念の差異は明らかではなく、今後の課題であるという(佐野直子「フランス語圏における『パトワ』概念の歴史の変遷と『言語』」「ロマンス語研究」、53号、2020、103-112頁。同「近代フランス語圏における『パトワ』と『方言』概念の変遷」「ロマンス語研究」、54号、2021年、27-36頁)。このようなことから、コルドレクス氏が脚注1で述べていることにしたがって、訳者も patois と dialecte との差異には深く立ち入らない姿勢を取ったが、「方言」にまつわる用語が並んでいる個所もあるため、それらに対しては便宜上、やや不明瞭ではあるが次の訳語を当てた: 「方言 patois」、「地方語 dialecte」、「地域語 parler」、「言語 langue」。

これに関連して、本文中には、「langue parlée」(直訳すると「話された言葉」と「langue écrite」(「書かれた言葉」という表現が対置するものとして用いられている。これはソシユール言語学に倣って、「話し言葉」と「書き言葉」という二項対立の訳語を当てられることが多い。しかし、本論の現地調査の録音資料には書かれたものを読んだ例もあり、それを「話し言葉」と一枚岩的に訳すのは適当ではないと思われるため、「発話された言葉」という訳語を用いた。加えて、「音声アーカイヴ les Archives de la parole」の仏語表記にある「parole パロール」は、「話された言葉」と訳するのが適当であろうが(上

記と同様の理由で「話し言葉」ではない)、機関の名称として考慮した結果、「発話された言葉」という意味をもつ「音声」を選んだ。

本論の学術的な価値は、その豊富な一次資料の発見・検証と、そこから厳密に紡ぎ出された歴史的文脈の批判にあるだろう。原著の脚注内に記された一次資料のレファレンス記号 DAV は、所蔵するフランス国立図書館 BnF の視聴覚部 Département de l'Audiovisuel の略である。脚注で参照されている一次資料は、2022 年にすべてデジタル化が完了し、BnF のデジタル図書館ガリカ Gallica で、どこからでも閲覧できるようになったところである（以下に資料一覧がある：<https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc1250877>）。以前から公開されていた音声の一次資料と合わせると、読者は本論に使用されたすべての一次資料をどこからでもインターネットで検証できるということになる。これが本論をここに翻訳したもう一つの理由である。（以上の URL の最終閲覧日は 2023 年 10 月 1 日）

謝辞

訳稿および解説の作成にあたっては、人文学林学術誌部門を通じ、学内外の専門家の方々から貴重なご意見を賜りました。この場を借りて心より御礼申し上げます。